私説

# 源氏物語

中村真一郎

私説・源氏物語

昭和三十八年八月一日　発行

著者　中村真一郎

発行者　柳沼沢介

印刷　堀内印刷所

著者との協定により検印を廃する

発行所　株式会社　婦人画報社

東京都港区芝田村町三の八

電話　591　一一四一―五

振替口座東京四〇〇一〇

定価三四〇円

私説

# 源氏物語

中村真一郎

婦人画報社

# 私説・源氏物語

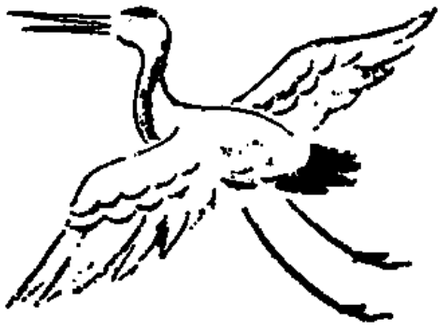
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 私説・源氏物語　目次

その一　序章（上）……7
その二　序章（下）……25
その三・桐壺……41
その四・帚木・空蟬……59
その五・夕顔……77
その六・若紫……95

その七・末摘花・紅葉賀……113
その八、花宴・葵・榊・花散里……131
その九・須磨……149
その十・明石、澪標……167
その十一・蓬生・関屋・絵合……185
その十二・松風・薄雲・朝顔……203
その十三・乙女・玉鬘、初音……221
その十四・胡蝶・螢・常夏・篝火……239
その十五・野分・行幸・藤袴・真木柱・梅枝・藤裏葉……257

装幀　粟津潔
カット　宮内裕



# その一　序章（上）

『源氏物語』は読まなくてはいけないか？――そんなことはありません。『源氏物語』は今日の言葉でいえば、小説の一種です。しかも千年も前に、古い日本語で書かれたものです。いそがしい私たちは、今の言葉で書かれた今の小説さえ、ろくに読む暇がない。それなのに、とうてい、千年前のものにまで、つき合う義理はない。そういうふうに考える人もあるでしょう。それなら、それでよろしい。私も賛成です。

人は誰でも、それが他人の害にならないかぎりは、したいことをし、したくないことはしない権利がある。実際は、なかなかそうはいかなくとも少なくともそういう社会状態を作りだすために、人類は長い間、努力してきたのだし、それが文明というものなのでしょう。だから、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いくら私が『源氏物語』を愛しているからといって、それを他人にまで押しつけるつもりはありません。

『源氏物語』は日本国民必読の古典だ、といっても、それは文学好きの人々なら、必ず読んでよかったという気がする古典という意味で、何も小説など読みたくないという人にまで、法律で罰金をとってまで強制的に読ませるべきだと、私はいうつもりはありません。

大体、そういう無理強いの精神と、小説を愉しむという心とは両立しません。他人を全部、制服を着せて同じ方向に向けようと考えるような人は、小説などは読まないものです。だから、『源氏物語』だって、読みたい人は、誰にすすめられなくても、勝手に読んでしまうし、読みたくない人は、牢屋にでも入れられないかぎりは、決して読みはしないでしょう。

それでいいのです。――しかし、それでも、なおかつ、私は「源氏物語を読みましょう」といいます。それは強制ではなく、勧誘です。騙されたと思って、読んでごらんなさい。面白いですよ。というのが、私のこの文章の意図なのです。

そうでしょう。『源氏物語』は、我国の代表的古典です。そして、古典だから読まなければならないのではなく、古典というのは、長い間、数々の世代が、次々と読んでそしていつも面

白いと思ってきたから現在まで残っているので、古典だというのは、非常に多くの人が、長年にわたって実験してきた結果、やっぱり面白い、ということになっている本、という意味なのです。だから、暇のない人が読んで損をしたという目にあいたくないと思ったら、古典こそ読むべきだし、また、もし読みはじめて面白くなかったら、すぐ読むのをやめたらいいじゃないですか。

しかし『源氏物語』というのは、学校で少し始めの方を習ったが、むずかしいばかりで少しも面白くなかった、という人もいるでしょう。が、学校で習って面白かったものがありますか？　シェイクスピアでもスタンダールでも、教室で読まれ、試験でしぼられれば、誰だって面白くなくなってしまいます。教室で習うのが、人生の至楽だという人は、変人でしょう。

それに考えてもごらんなさい。『ハムレット』は一晩の芝居です。ということは、ひと晩ではじめから終りまで観るように作られているという意味です。それを、学校で週一回ずつ習って、一年間かかって読み終えたのでは、わからなくなってしまうのもあたりまえです。（ただし、研究のために時間をかけるのは別の話で、私は文学研究の話をしているのではなく、無邪

気な愉しみとしての読書の話をしているのです。）

ベートーヴェンの交響曲を、恐ろしくゆっくり演奏して、一年かかって終るようにしたら、誰が一体、感動するでしょう。小説だって同じことです。小説は勿論、音楽のように享受する時間が決められてはいません。各人勝手の速さで読むことができるし、好きな時に中絶し、また、読みつづけることができます。しかし、だからといって、一年かかって、五十四章の小説のはじめの三章だけ読むというような絶望的な鈍行ぶりで読んだのでは、古代日本語の研究はできても、小説としての面白さなど、どこかへ消えて行ってしまうでしょう。

そうして『源氏物語』は、（研究者にとっては何であろうと）無邪気な読者にとっては、普通の小説なのです。だから、教室でいやな思いをしたということは参考になりません。たまたま一度、交通事故に遭ったからといって、自動車が危険な乗物だということにはならないと同じことです。

が、それでも、学校で一年間かかったのは、それだけむずかしかったからで、普通の現代日本語しか知らない読者が、そんな、たとえば半年かそこいらで、読み通せるわけがない。というもっともの疑問もあるかもしれません。

そういうもっともの疑問に対しては、私はいつもこう答えることにしています。それなら、現代語訳で読んだらいいじゃないですか。与謝野晶子も谷崎潤一郎も全訳を出しています。現代文学の代表的な文学者である、この二人に、競争して飜訳されているなどという好運は、滅多にないことです。それだけでも、文学好きの読者なら、ちょっと読んでみようかという気をおこすくらいのものです。

それに、皆さんは『ホメロス』だろうと『論語』だろうと、『聖書』だろうと、『神曲』だろうと、いや近代のトルストイでもバルザックでも、たいがい、現代日本語の飜訳で読んでいるでしょう。古代日本語を現代語同様読めるようになることは愉しいことには違いありませんが、それを勉強する暇がないからといって、みすみす、せっかくの『源氏物語』をあきらめる手はありません。そういうわけですから、まずこだわらずに現代語訳で読みはじめましょう。そうして、この小説のマニアになったら、よせと傍(はた)からいっても、自然と原文を覗きたくなるに違いありません。それが人情の常だし、小説を読むのに人情の自然にさからっては意味がありません。

それでは、なぜ『源氏物語』は面白いか。読んでみればわかる。――それが最も簡明な答えです。簡明すぎて物足りないのですが、それ以上、その面白さを分析するとなると、議論百出、百人百説ということになります。またそれが古典の古典たるところでしょう。いろいろの経験や環境や年齢の人が読んで、それぞれ別の面白さがある、というのが優れた文学の特徴なのですから。

しかし『源氏物語』を研究する人、その専門家のなかには、時々、この作品が古い時代のものだという理由で、敬意を表する人がいます。最近も、ある解説書を開けてみましたら、第一頁に「源氏物語は世界最古の文芸である」と書いてありました。

冗談じゃありません。いくら『源氏物語』の専門家でも、他国の文学について、そんなに知識が貧弱では、一体、文学がわかるのかどうか怪しくなります。『源氏物語』はたかだか千年前の物語です。しかし、それよりずっと以前に、倍も昔に、すでに人類は、お隣りの中国でも、インドでも、ギリシア、ローマでも、素晴らしい文学的傑作を続々と生みだしております。

『源氏物語』を世界文学の流れで見れば、「最古」であるどころか、古代文学のなかでは最新の作品です。

が、「最古の文芸」という、文芸という言葉が筆の走りで、実は「最古の小説」という意味だということになれば、どうでしょう。これはかなり多くの研究者たちが誇りをもって挙げている『源氏物語』の特徴のひとつですが、これとてあてにはなりません。現に、ギリシア語でも『ダフニスとクロエ』をはじめとする幾多の長編がすでに書かれています。ラテン語でも有名なペトロニウスの『サチリコン』という手のつけられないような溌剌たる傑作が残されています。

そうした大作の遙か後になって、ようやくわが国で『源氏物語』が現われるという段取りになっています。何が最古なものですか。ではどうして、こうした間違った意見が、大勢の文学研究家の口から出たかというと、実はこれは単なる無知のしからしめたものではなく、(大体、国文学研究家が、日本文学の本家ともいうべき中国文学について知らないはずはないのですから)明治以来の西欧文明に対する我国知識人の劣等感の現われなのです。

『源氏物語』を世界最古という時、その人にとって、世界は実は西欧なのです。近代において



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com